

## 第5章 緒方盆地の本質的な価値

### 第1節 緒方盆地の景観特性のまとめ

本節では、第2章から第4章までで整理した文化的景観に関する調査結果を、緒方盆地の景観特性として6つのストーリーにまとめた。

#### ①大地形成のストーリー

阿蘇火山噴火による堆積物が緒方川により侵食され、かたち作られた景観である。

阿蘇火山の溶結凝灰岩に柱状節理が形成され、緒方川の水 flow により侵食されることで垂直の凝灰岩壁や巨大な滝（原尻の滝）が形成された。また緒方川の氾濫により、上年野・辻・緒方盆地に段丘が形成され、内陸部にはは広大な景観が広がった。緒方盆地は、阿蘇火山噴火の堆積物と緒方川の侵食により形成された景観であり、人々がこの地で生業を営む源となった。

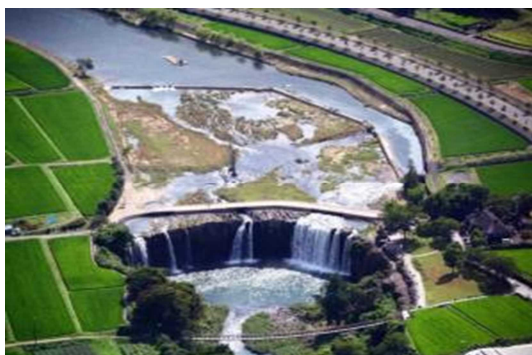


写真1 原尻の滝と下井路堰



写真2 緒方川と段丘（牧原）

#### ②石造文化のストーリー

人々が、阿蘇火山噴火でできた溶結凝灰岩を、巧みに磨崖仏や石橋等に加工・利用し、かたち作られた景観である。

平安末期から現在にいたるまで、磨崖仏、石風呂、石橋、石垣、民家の基礎、神社の鳥居・灯籠、墓石など、溶結凝灰岩の性質（強溶結、弱溶結）に応じて、様々なものに利用する石造文化が生まれた。緒方盆地は、阿蘇火山噴火でできた溶結凝灰岩を巧みに加工・利用し、かたち作られた、様々な石造文化が織りなす景観である。

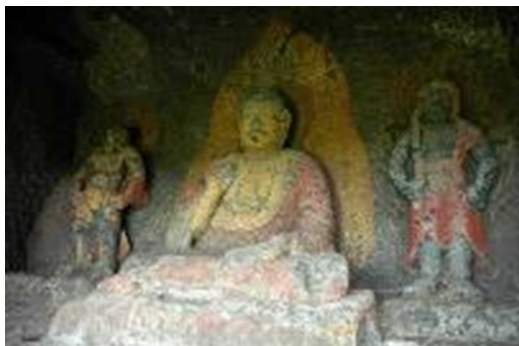


写真3 緒方宮迫東石仏

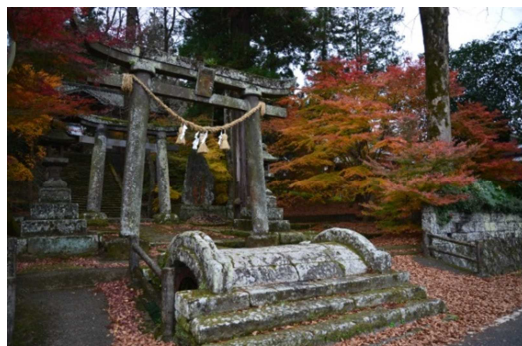


写真4 二宮八幡社参道石橋、鳥居

### ③盆地との暮らしのストーリー

旧石器時代から現在まで、盆地や周辺地形を利用した人々の歴史、土地利用の変遷が刻まれた景観である。

豊後大野地域は、阿蘇火山の噴出物が膨大に堆積し、河川により侵食され各地に台地が形成された。岩戸遺跡（豊後大野市清川町白尾）では多量の旧石器や石偶が出土し、国指定史跡となっている。大石遺跡（緒方町大石）では、縄文晩期の深鉢と浅鉢、扁平打製石斧が大量に出土し、縄文晩期農耕論提唱の舞台となった。緒方盆地北側にある越生の漆生地域では、尾根上に古墳群が営まれ（大久保古墳群）、その周辺の凝灰岩壁には多数の横穴墓が穿たれた。このように豊後大野地域では古くからの人々痕跡が残されている。

さて、緒方盆地の北側に位置する下自在台地では、千人塚遺跡発掘調査が行われた。遺跡から旧石器時代のナイフ型石器や三稜尖頭器、縄文時代前期の突帯文・沈線文・刺突文・押引文土器が出土した。また、弥生時代の住居跡が5軒検出され、緒方盆地周辺での初の弥生住居跡の発掘となった。古墳時代には、原尻地区を見下ろす丘陵（六箱地区）に横穴墓が営まれ、馬具（轡2基）・直刀1本等が副葬された。有力な豪族の存在を示すこれらの品々は、江戸時代に偶然発見され、岡藩主による記念碑が建立された。平安末期には、三宮社付近で経塚が営まれ、経筒2本が埋納された。これらは江戸時代に偶然出土し、岡藩主により記念碑が2基設置された。下自在台地では、室町時代には175基もの墳墓が営まれた。



写真5 緒方盆地と丘陵地帯の利用区分

緒方盆地周辺の台地上では、現在でも盆地を見下ろす各所に近世墓が営まれ、また集落ごとに神社が設置されている。盆地内を水田として利用するために、信仰の場として台地上が選ばれたのである。軸丸川の最上流地点に、平安時代に設置された熊野社には、仏堂が併設され、如来型坐像と不動明王坐像が安置された。軸丸川は緒方盆地を潤す重要な水源の一つであり、その水源を守護するため、緒方氏が熊野社を置いたのではないかと推定されている。

緒方川兩岸の段丘には水田、そこから標高が高くなる場所には井路と住居が営まれ、住居周辺には水源としてイノコが穿たれ、さらに台地側に向かって畑地、そして台地の高台には神社や墓所が営まれるという、特徴的な景観である。このように、緒方盆地及び周辺の台地には、人々が居住を始め、農業生産を開始し、現在に至るまでの歴史・土地利用の変遷が刻まれている。

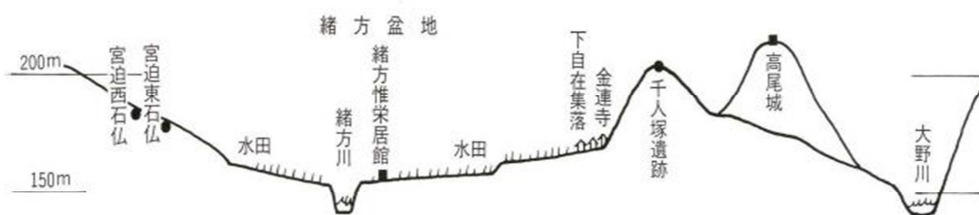


図1 「千人塚遺跡発掘調査報告書」より 1999 緒方町教育委員会発行



写真6 三宮社と緒方盆地



写真7 三宮経筒



写真8 壑古器碑



写真9 六箱横穴遺物 古墳時代の馬具（轡）と直刀。  
江戸時代に出土し、藩命で記録が作成された。



写真10 出土の記録と記念碑

#### ④井路網開鑿のストーリー

祖母山系を水源とする地上や地下の水を利用し、井路網（水路網）等を開鑿した。この井路群が補完しながら圃場を潤し、人々は、その井路群に感謝を捧げ、今もそれを生活に組み入れた景観を維持している。

緒方盆地では、平安末期、祖母山を信仰する緒方氏により開発された井路（緒方下井路の原型井路）を筆頭に、江戸期から近代にかけて緒方上・下井路、三区井路（野仲井路）、原尻古井路、長淵井路などの長大な井路が開鑿され、井路沿いには集落が形成された。緒方上・下井路では、複数の小河川を幹線に取り込み、水量を増やし下流の水田に大量の灌漑用水を送る仕組みが造られた。明治以降、土木技術の発達に伴い、大野川上流域を水源とする明正井路、柚木井路・原尻新井路、富士緒井路などの長大な井路が台地（丘陵）上に開鑿され、緒方盆地の南北にある台地（丘陵）に棚田が形成され、人々の暮らしを豊かなものにした。また、これらの近代に開鑿された井路の末流水は、先に開鑿された緒方上・下井路や三区（野仲）井路に流入し、緒方川両岸の広大な圃場を潤すための補完水となり、水を余すことなく利用する仕組みができあがった。井路を渡り民家と田を行き来するために、井路上には石橋を含む多数の民家橋が造られ、橋の側には弘法大師像が置かれたり、井路水を利用する汲ん場が設置されるなど、独特の景観がかたち作られた。また、緒方川の左岸・右岸に形成された集落では、地下水を利用するために多くのイノコが穿たれ、生活用水の確保が行われた。下自在地域では、米どころ緒方を象徴するかのよう、豊富な地下水を利用する造り酒屋が2軒並列して営まれ、今に至っている。井路周辺の農家では、農地耕作のために牛が飼われ、牛糞と藁などを混ぜ堆肥を生産する「オトシゴンヤ（落とし小屋）」が多数造られた。居宅・

牛小屋・堆肥生産場が一体化した農家住宅は、緒方盆地の各所に残っており、農村景観を特徴づけている。このように、緒方盆地は多くの井路が網の目のようにめぐり、それが連結し水田が営まれ、井路の水を生活に組み入れ利用する農村の景観がかたち作られている。



写真 11 酒米を蒸す風景 (12月)



写真 12 酒米を蒸す酒屋2軒 (12月)



写真 13 緒方盆地から見る傾山系と祖母山系 (10月)



写真 14 緒方上井路の井手普請 (4月)



写真 15 緒方下井路の汲み場 (上自在)

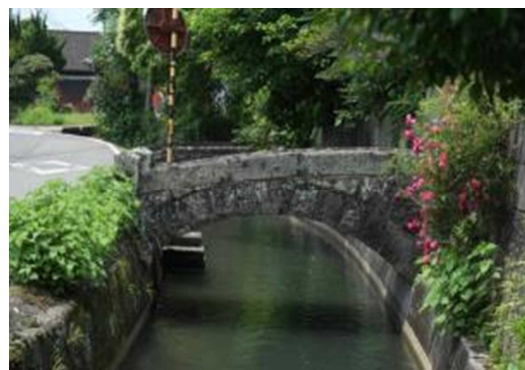


写真 16 緒方上井路に架かる石橋 (下自在)



写真 17 落とし小屋を持つ農家住宅 (原尻)



写真 18 民家とコンクリート橋と井路 (上自在)

## ⑤生活近代化のストーリー

交通体系の近代化（鉄道開通、石橋建設）・農業生産の近代化にも「水と石が織りなす農村景観」の特色がある。

大正 11 年に開通した緒方駅と周辺地域を接続し迅速な物資運輸を行うため、長瀬橋・原尻橋・鳴瀧橋という巨大なアーチ式石橋が緒方川に建設され、凝灰岩の河床に凝灰岩製の巨大石橋が架かるといふ独特の景観が生まれた。緒方駅開通に伴い、馬場地域が市街地化し、緒方村の商業の中心地となっていった。昭和 6 年に緒方村・南緒方村が合併し、緒方村の中心地であった馬場地域に、新たに緒方村役場庁舎が建築された。また、盆地を取り囲む丘陵地帯では、富士緒井路・明正井路・柚木井路・原尻新井路などが明治から大正にかけて次々と開鑿されていった。それに伴い、畑地であった地域が水田化し、各地に美しい棚田が形成され、人々に豊かな暮らしをもたらした。



写真 19 長瀬橋（大正 12 年建設）



写真 20 原尻橋（大正 12 年建設）



写真 21 大正 11 年 鉄道開通式（緒方駅）



写真 22 サイフォン管理設（大正初期）

## ⑥農耕民俗文化のストーリー

人々が、地形と地質を利用し農耕を営み、農耕によって営まれてきた川越し祭等の祭礼、信仰などの民俗文化遺産が今も受け継がれ、生活と織りなす景観がある。

農業生産を基盤とし、人々は神仏に五穀豊穡を願い、様々な民俗芸能（神楽、獅子舞など）を生み、様々な民俗行事（コダイなど）・信仰（石風呂、お大師様、地神塔、庚申塔、板碑、石幢、宝篋印塔、宝塔など）が育まれた。農業生産を主体とする地域で、四季折々の祭や風習が生み出され、それが今に引き継がれている景観である。特に、緒方三社川越し祭りは、緒方川の水と緒方上・下井路に感謝の念を捧げる祭りとして、緒方盆地に居住する人々の井

路に対する考えを象徴する祭礼である。大正末期から昭和40年代までの農村風景は、農家に生まれ農家に嫁いだ後藤絹さんによって紙粘土で再現され、「絹さん人形」として往時を偲ばせている。



写真23 辻河原石風呂と体験入浴



写真24 体験入浴



写真25 緒方三社川越し祭

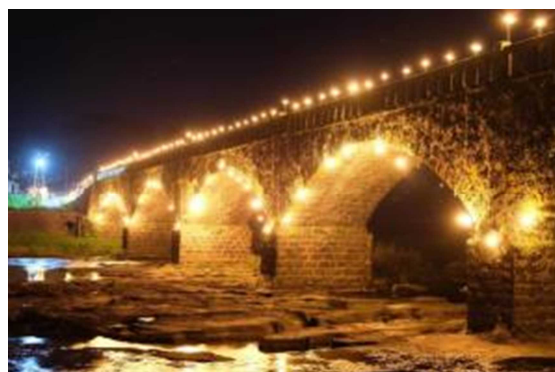


写真26 コダイ (小松明)



写真27 「稲収納の風景」(絹さん人形)



写真28 軸丸獅子舞 (緒方五千石祭)

## 第2節 緒方盆地の文化的景観の成立過程

緒方盆地の文化的景観の成立過程を、視覚的にわかりやすく表現するため、空間概念図の作成を行った。

### 概念図作成の手順

- ・以下のフローに従い、概念図を作成した。

#### 【緒方盆地の文化的景観の成り立ちを時代別に整理】

- ・緒方盆地の文化的景観の成り立ちを、当地域に関わる既往調査文献等を参考に「古代以前の地形形成活動」、「中世以前（室町時代以前）」、「近世（江戸時代以前）」、「近代（明治以降）」の4区分に分け、時代別に整理した。



#### 【時代別に整理した文化的景観の成り立ちを平面図に図化】

- ・航空写真をベースとして、「中世以前（室町時代以前）」、「近世（江戸時代以前）」、「近代（明治以降）」に区分して、3段階の開発によって形成された主要な文化的景観の構成要素を地図上にプロットした（図2参照）。



#### 【平面図に図化した文化的景観の成り立ちを、イラスト等を用いて表現】

- ・3段階の開発によって形成された主要な文化的景観の構成要素を、イラストも含めてレイヤー構造（層の重なり）によって表現した。
- ・レイヤー構造で示すことにより、現在の人目に映る文化的景観は、各時代の開発の積み重なるの結果として形成されていることを表現した（図3参照）。

②緒方盆地の文化的景観の成り立ち

文化的景観の成り立ち	イメージ写真
<p><b>近代（明治以降）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大正 11 年に開通した緒方駅と周辺地域を接続し迅速な物資運輸を行うため、巨大なアーチ式石橋が緒方川に複数建設された。</li> <li>・明治以降の土木技術の発展に伴い富士緒井路等がつくられ軸丸棚田を潤した。</li> </ul>	 <p>原尻橋 <span style="margin-left: 200px;">軸丸棚田</span></p>
<p><b>近世（江戸時代以前）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上井路がつくられ、家屋は上井路の上に移ることになる。</li> </ul>	 <p>水田と集落、背後の緑が構成する遠望景観</p> <p>緒方上井路と石橋</p>
<p><b>中世以前（室町時代以前）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・黒土甲川と軸丸川からの水が井上条里を潤した。</li> <li>・緒方三郎惟栄が宮田と深町を接続し、原尻の滝（緒方川）から下井路に水が注ぐようになる。</li> </ul>	 <p>緒方宮迫東石仏 <span style="margin-left: 200px;">二宮八幡社石橋と鳥居</span></p>
<p><b>古代以前の地形形成活動</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・阿蘇火山噴火の堆積物が緒方川の水流により侵食され巨大な滝と河岸段丘が形成された。</li> </ul>	 <p>緒方盆地の鳥瞰写真</p>



# 緒方盆地の景観形成（中世以前・近世・近代 3段階の開発）

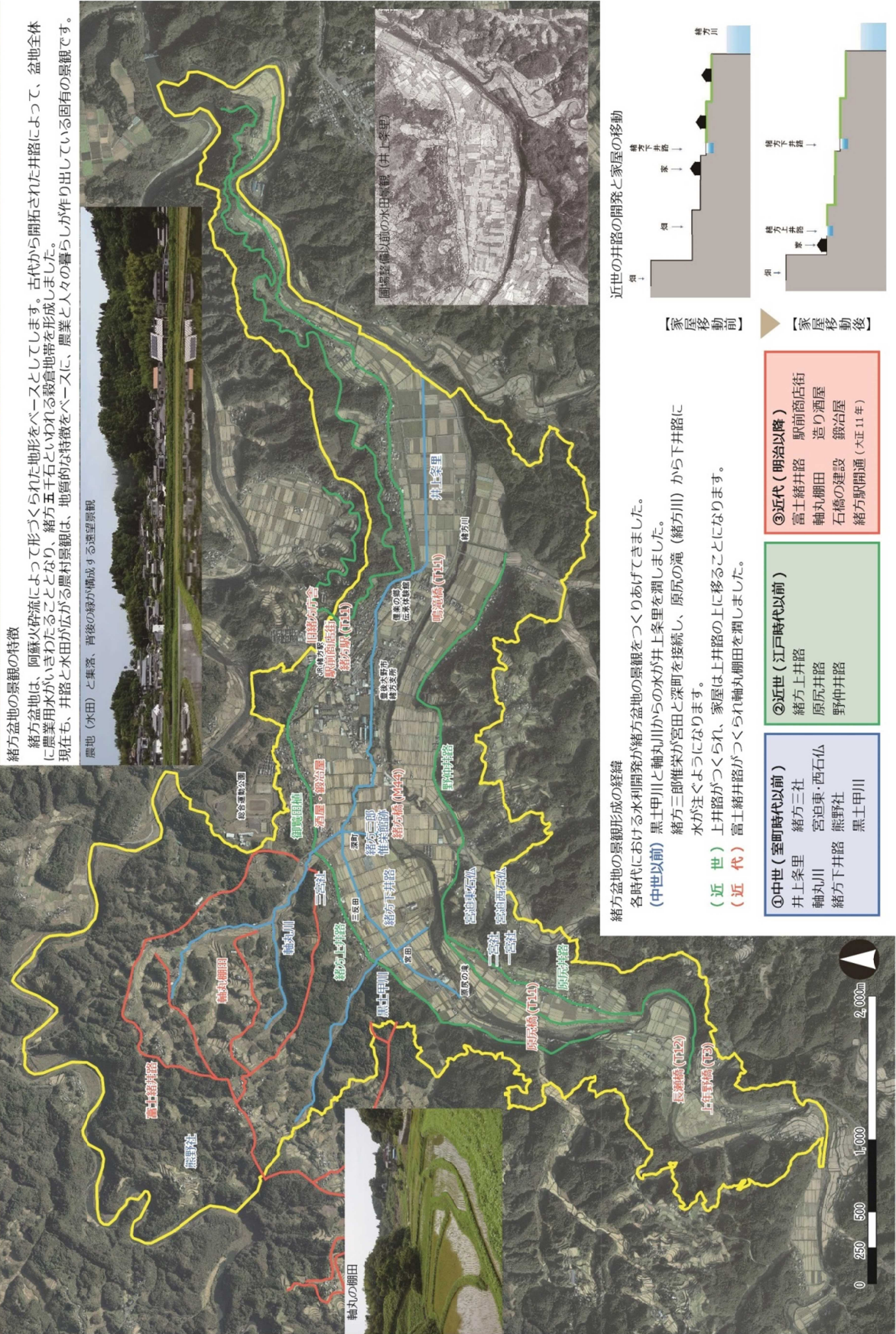


図 2 緒方盆地の主要要素と景観形成経緯の図

# 緒方盆地の景観特性

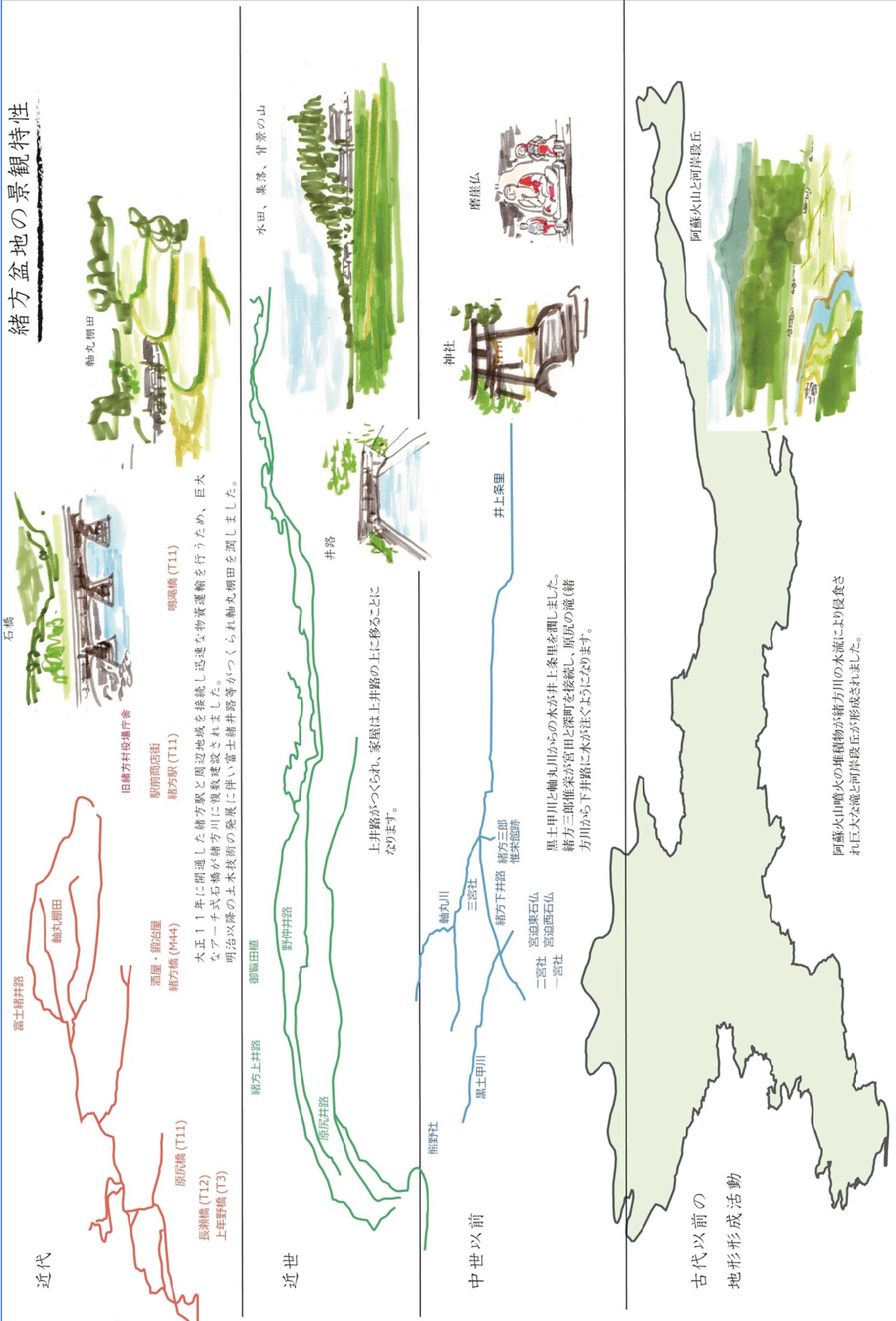


図3 緒方盆地景観特性の年代層図

### 第3節 緒方盆地の農村景観の本質的な価値

「第1節 緒方盆地の景観特性のまとめ」、「第2節 緒方盆地の文化的景観の成立過程」から、緒方盆地の農村景観の本質的な価値は「水と石が織りなす農村景観」と端的に表現できる。

以下に、その本質的な価値を説明する。

(緒方盆地の農村景観の本質的な価値)

緒方盆地の景観は、阿蘇火山の火砕流の堆積物が形成した基盤地形を水が侵食し、人間がその基盤地形と石、そして水を巧みに利用し、形成してきた景観である。これを一言でいえば、「水と石が織りなす農村景観」となる。第1節で述べたが、その景観の特性をあらためて整理すると、以下ようになる。

- ① 阿蘇火山噴火による堆積物が緒方川により侵食され、かたち作られた景観である。
- ② 人々が、阿蘇火山噴火でできた溶結凝灰岩を、巧みに磨崖仏や石橋等に加工・利用し、かたち作られた景観である。
- ③ 旧石器時代から現在まで、盆地や周辺地形を利用した人々の歴史、土地利用の変遷が刻まれた景観である。
- ④ 祖母山系を水源とする地上や地下の水を利用し、井路網（水路網）等を開鑿した。この井路群が補完しながら圃場を潤し、人々は、その井路群に感謝を捧げ、今もそれを生活に組み入れた景観を維持している。
- ⑤ 交通体系の近代化（鉄道開通、石橋建設）・農業生産の近代化にも「水と石が織りなす農村景観」の特色がある。
- ⑥ 人々が、地形と地質を利用し農耕を営み、農耕によって営まれてきた川越し祭等の祭礼、信仰などの民俗文化遺産が今も受け継がれ、生活と織りなす景観がある。

緒方盆地の景観は、人との関係でいうと、「中世以前（室町時代以前）」、「近世（江戸時代以前）」、「近代（明治時代以降）」というように土木技術の発展を反映した3段階の開発によって形成された。緒方盆地の人々は、阿蘇火山の大噴火によって形成された自然基盤を巧みに利用し、この地域に合った水利システム、生活システムを築き上げてきた。

人々は、長い期間にわたって稲作により暮らしを豊かにすることをめざし、井路の開鑿を続けてきた。水稻などの五穀豊穡を願うため、各地に神社や磨崖仏などを築き、それを維持しながら四季を通じて祭祀を執り行ってきた。春には井路普請を開始し、夏には水神(恩)祭を行い、神社の秋季祭礼では、五穀豊穡を願うため獅子舞・白熊・神楽が奉納され、人々はそれを今も継続し続けている。緒方盆地の景観は、古代から



近代にかけて、地形・地質を活かし開鑿された井路群が、補完し合いながら圃場を潤し、その井路群に感謝の念を捧げ、今も井路群を維持する人々によってかたち作られた。

緒方盆地の文化的景観の本質的な価値は、自然と人間のコミュニケーションが歴史的、文化的に検証できる景観が今も生きていることであり、それは「水と石が織りなす農村景観」という言葉にすべて集約される。